

L10c            **2010年木星南赤道縞攪乱の白斑の明るさの変化について**

浅田正（九州国際大学）

木星の表面に存在する縞模様のうち、南赤道縞と呼ばれる南半球でもっとも赤道よりの縞（暗色）は、時々明るくなってしまうことが知られている。そしてその明るくなった状態から元の暗い状態に戻るには、南赤道縞攪乱と呼ばれる活動現象が発生する。この現象では明るい白斑が発生し、それに伴う暗色模様が経度方向に広がってゆく。

2010年の木星南赤道縞は攪乱の直前の明るい状態であった。11月9日に初めて南赤道縞に白斑が観測され、その後白斑が増えていく様子や暗色模様が東西に広がっていく様子が世界中の観測者によって追跡された。

われわれは、D. Parker氏（アメリカ合衆国フロリダ州）と阿久津富夫氏（フィリピン・セブ島にて観測）の近赤外のメタンバンドの画像から、白斑の明るさの時間変化を調べたので、その結果を報告する。なお、南赤道縞攪乱をメタンバンドで観測したのは世界初である。